



図書館情報大学



附属図書館報



Vol. 16 No. 1 2000

目 次

図書館情報学の社会科学的側面

—情報資料媒体論と情報メディア論との関係における管見—

(大庭治夫)	2
初心者向け「筑波の道」案内 (綿拔豊昭)	4
PC-UNIX (大澤文人)	5
Knowledge Worker の導入 (横山敏秋)	6
ローマでの研究生生活 (藤井 敦)	7
図書館から	8
附属図書館日誌	8



図書館情報学の社会科学的側面*

—情報資料媒体論と情報メディア論との関係における管見—

大庭治夫**

〔はじめに〕参考図書としての辞典・辞書類などや哲学書などにも多く見られる学・科学・論などに関する定義や概念規定によれば、学ないし学問は科学と哲学の総称を意味し、学や科学が内容上に体系性を有し、価値判断を含まないのに対し、論は、それらの諸条件に拘束されない。また科学は自然科学・社会科学・人文科学の総称を意味する。

こうした基本認識に立脚すると、図書館情報学は基礎論としての哲学をも含み、且つ、上記3科学の諸要素をも具有することになる。以下においては、表題に見られるように社会科学的側面を中心に見てみたいと思う。社会科学の世界においては、方法論が極めて重要な意味・内容を持つのであるが、ここでは一者を他者との関係において考察する「関係論的考察」という見方・考え方を重視したい。

〔図書館情報学管見〕伝統的な図書館学と最新の情報学との総合が試みられる図書館情報学に関しては諸説ある。管見としての私見を申し上げることを許されるならば、幾つかの可能性を提示して参考に供したい。①歴史的に見れば、図書館学が生成・発展する過程において情報学が加わってきたという意味で図書館学の一形態となる。②上位概念・下位概念という視点・論点からすれば、情報学という上位概念の一部分という意味で情報学の一形態となる。③その他としては、いずれとも言えない総合的・学際的学問分野として位置づけられる。

〔情報資料媒体論と情報メディア論〕本学における図書館情報学の一分野に情報資料媒体論（学部）と情報メディア論（大学院）なるものがある。そこで再び管見としての私見を申し上げることを許されるならば、両者は一体的な関係にある。

一方では、情報と資料との関係について、資料とは記録された情報と言われたり、乗せるものと乗せられるものと言われたりしているように、いわば表裏一体の関係にある。他方では、媒体とメディアとの関係も採り上げられる。ここで本学の教官仲間でも文系・理系で解釈は微妙に異なりうる。文系は、メディアという外来語を日本語に翻訳したものが媒体であると考えている者が決して少なくないのに対して、理系は多少異なり、媒体は正確には媒体材料の意味で使用されることが多いようである。

筆者は、異なった分類は基準が異なるということ、それぞれに一理あるという基本認識を持っている関係上、最広義で考えることが多く、両者を特に区別してはいない。その意味においてマクルーハンのメディア論を基本前提として各論に入ってゆくという方法を多用しており、そこから専門・特化しつつ考察を進めている次第である。そうであればこそ人間社会におけるコミュニケーション媒体や手段をメディアと見なし、そこからマス・メディア論その他、多種多様な分野が展開されることになる。

〔図書館資料論管見〕関係論的考察からすると、上記の如き最広義の資料論を念頭に置きつつ、図書館の社会的意味・内容・役割に注目したい。社会科学の基本認識は、万事が時間と空間により異なるゆえ、変わり行くものと基本的に変わらざるものに留意しつつ考察を進める。なお、館種の相違もまた論点として意味を有すると思われるが、それは社会的背景を有するからである。即ち、社会全体における社会体系ないし社会システム中いかなる社会単位と結びついているかにより、その図書館の使命・役割が異なり、図書館資料の意味も異なりうる。

最近では司書講習や司書教諭講習のカリキュラム中に、従来どおり「資料」概念を最広義に解釈して

*Aspects of Information and Library Science from the Viewpoint of Social Sciences, by Haruo OHBA

**本学教授

視聴覚資料などの概念・用語を存続させる場合と、情報メディアなどの概念・用語を使用する場合がある。これなどは氷山の一角にすぎないが、従来の図書を中心とする資料からインターネット等に象徴される情報メディアが注目を集めるようになった。

〔社会科学資料論管見〕ここで申し上げたいことは社会科学とは何かを多少なりとも勉強することこそ出発点となる、という事である。従来は社会科学の二次資料、三次資料に関する情報資料の紹介が基本となっていたように思われるが、少なくとも本学においては、予備知識・基礎知識として社会科学概論・概説を勉強することが望ましい。短期間で習得しなければならぬ場合は別として、恵まれた数年間を大いに活用するというのであれば、最低限の知識は身につけておくべきであろう。専門書でなくても、入門書や解説書など多種多様な社会科学概説が出回っているのだから、自分の能力範囲内で努力することが必要であろう。就職との関係も大いにある分野であることを忘れてはならない。

〔官公庁資料論管見〕これもまた就職との関係が大いにある分野として注目してほしいのであるが、とりわけ公務員志望の方々には、そもそも官公庁とは何かを知った上で、政府刊行物や地方行政資料などの資料に携わることが望ましい。前述の如く、社会科学は、時間・空間により異なり変化する現実の人間社会を考察する。たとえば、役所とか役人の基本姿勢に関しても、政府刊行物の中でも身近に感じられる白書などにおいて微妙な変化が生じていることが感知される。わが国における白書の場合、従来は各省庁の年次報告書として、過去一年間の業績を書きつらねることが多かった一般的風潮が少しずつ変化を示し、回顧と展望の中で反省点も記述するようになりつつある。たとえば、同じ経済企画庁が刊行している白書でも『国民生活白書』は真の豊かさとは何かを考え、それ以外では『厚生白書』や『環境白書』もまた、光と影を記述するよう思われる。

他方、地方行政資料などにおいても、情報公開制度が出来て以来、地方公共団体は国よりも一足先に原則として情報を公開することで住民に対応している。その中でも特に自然環境や生活環境に関する情報の公開を要求する事例が増加しつつある。たとえば、ダイオキシン測定値のデータであるとか、住民税の使途（議員達の海外研修旅行等）などの事例が多い。

これらの事柄は、社会科学の視点・論点からすると、広く民主主義の歴史と形態に関係する意味・内容を含んでおり、その含意は大きく且つ深いと言える。国民・地域住民の基本的な人権としての「知る権利」と、それに対応する官公庁の情報公開義務とが、これらの根底ないし背景にあることは関係者一同が大いに留意する必要がある。

〔おわりに〕表題にある通り文字通り管見の域を出ない拙文を結ぶにあたり、筆者の基本認識の要点を整理してみたい。

- ①一者を他者と関係づけて考察し、理解する。
- ②定義や概念規定は最広義に解釈する立場を採る。
- ③社会科学の立場から接近して考察する。
- ④情報資料媒体と情報メディアは同義的に解する。
- ⑤資料とは記録された情報と見なされる。
- ⑥最広義のメディアには媒体も資料も含まれる。

以上のような諸点を重視しつつ資料論の諸形態を考察すると、官公庁資料論に見られるように、留意すべき事柄が明確になるように思われる。たとえば資料概念がメディアをも包括するものと理解されることが一般的になり（視聴覚資料など）且つ従来は二次資料中心だった資料論が各種情報資料源として一次データないし一次資料を重視するという新動向が、今や注目されている。官民関係も情報公開制度の普及と共に〈informed citizen〉が、近代民主主義社会において必要不可欠な基盤であることも認識されつつある。その意味においても公務員は、まさに〈public servant〉の新世紀を迎えることになるだろう。

初心者向け「筑波の道」案内*

綿 拔 豊 昭**

晴れた日には、図書館情報大学から筑波山がよく見える。筑波山は、連歌作者にとって特別な山であった。『日本書紀』に日本武尊と火ともしの翁との次の唱和が載る。

新治つくばを過ぎていくよか寝つる

かかなべて夜にはこのよ日には十日を

日本人はかつてルーツ（系図や物事の起源等）を重視した。ルーツは有名人がかかわっていて、古いことがのぞましい。先の唱和を連歌の起源と考え、連歌を「筑波の道」と称し、二つの准勅撰連歌集は共に「つくば」がその名に付けられた。また連歌三神の一つに日本武尊が加えられたのも、この唱和によると考えられる。

筑波山の裏側に所縁の深い真壁道無の肖像画(伝)が、平成十一年、文化財として認定されている。この真壁道無ほか真壁氏の人々が、連歌に造詣が深かったらしいことは存外知られていない。また筑波山では月次連歌が行われていた。郷土史的、文化史的、宗教的に注目すべきことであるが、資料の翻刻等もなされていないようである。近世後期のその資料がある大阪への旅費と資料撮影にかかる費用あわせて十万円ほどあれば、とりあえず筑波山月次連歌の実態が解明できそうである。郷土愛ある地元出身の学生が連歌に興味を持ち、そうした調査をすることを願って、連歌の入門書等を紹介しておく。

入門書としては、岩波書店、小学館、新潮社で出された、古典文学の全集の中の連歌関係のものがあげられる。これらは解説も入門的で、作品に注などが付されており必読書。辞典は『俳諧大辞典』[911.3：I-88]（明治書院）と『俳文学大辞典』（角川書店）がある。前者は後者よりも数十年も前のものであるが、後者にない項目もあり、両方を必要とする。連

歌作品の索引としては『連歌総目録』（明治書院）がある。

概説書としては、山田孝雄『連歌概説』（岩波書店）、伊地知鐵男『連歌の世界』（吉川弘文館）がおすすめ。共に何十年も前のものだが有益。

連歌史関連のものでは、福井久蔵『連歌の史的研究』が基礎図書だが、出版社がつぶれ、新刊では手に入らない。また木藤才蔵『連歌史論考』（明治書院）は名著。増補改訂版を見ること。

作家研究は、連歌師宗祇に関する本が多い。最近のものでおすすめは島津忠夫『連歌師宗祇』（岩波書店）、奥田勲『宗祇』（吉川弘文館）。

資料としては、三弥井書店から『連歌論集』が四巻でている。また同社から刊行中の『新撰菟玖波集全釈』もあった方がいい。古典作品の全注釈もの多くは、絶版になると古書価格が急騰するので入手を考える人ははやめに。

なお図書館的に興味のある人は、京都北野社で成された裏白連歌の原懐紙が、ご近所の筑波大学に所蔵されるので、それをみることをすすめる。連歌作品の記録の形態の有り様がよくわかる。

研究書は、伊地知鐵男、金子金治郎、木藤才蔵、島津忠夫、奥田勲の著書が、数十年前のものも含め評価が高い。具体的な書名は、著者名から検索して欲しい。論文は、年度ごとに学会誌『連歌俳諧研究』に論文等の目録が載るので参照されたい。

本稿執筆にあたり、与えられたテーマは「人文科学関係の情報資料媒体の紹介」。人文科学資料の特性は、自然科学と比較して、情報としての価値が長く維持され、論文のタイトルは抽象的であり、言外に含みを持つこともあり、また扱われる資料が広範囲に及ぶため、全てを深く語れる個人は皆無に等しいとされる。その特性をふまえ、対象を連歌にしぼり、「らしく」紹介してみた。

*Beginner's books on Renga-poem, by Toyoaki WATANUKI

**本学助教授

PC-UNIX*

大澤 文人**

PC-UNIX とは一般的に IBM の PC/AT とその互換機 (通称, Windows パソコン) で稼動する UNIX (または UNIX に似た OS) である。しかし, Macintosh, PC-98, X68000 などでも稼動する。

近年, インターネットが普及し, 個人レベルでサーバを持つような環境が実現しつつある。また, イントラネットのような閉じられたネットワークでも, 情報共有・資源共有のためサーバを設置する機会が多い。そのような時, 従来においては Microsoft Windows NT Server のようなサーバ OS を導入することが多かったが, 低コストで高信頼性の PC-UNIX に注目が集まっている。

PC-UNIX には, 商用として売られているものと, フリーで使えるものに大別される。商用のものとして代表的な製品を挙げると, SCO UNIX, BSD/OS, Solaris, OPENSTEP などがあげられる。(Solaris に関しては, 最近, 次期バージョンの 8 から 8 CPU 以下のライセンス料無料, ソースコード公開などフリーのものに近づいているが, 現時点では商用のカテゴリに分類した。)フリーで使えるものに関しては, Linux, FreeBSD, NetBSD, OpenBSD などが存在する。PC-UNIX が話題になっている原因に, フリーであることがあげられるため, 今回はフリー PC-UNIX の中でもユーザ数の多い, Linux と Free BSD について解説する。

・Linux について

Linux は 1991 年に当時フィンランドの学生だった Linus Torvalds がプログラミングを勉強するため, 「PC で動く UNIX ライクなカーネルを作った」といって FTP サイトに公開したのが始まりだと言われている。つまり Linux は「UNIX に準拠した OS」であって, 正確には「UNIX」ではないと言える。その特徴は,

a. 解説記事, 解説雑誌が数多く出版されており,

OS 自身の入手が容易である。

b. よく質問される事項 (FAQ という) が文書としてまとめられており, 初学者にわかりやすい。

c. 市販ベースのアプリケーションソフトが PC-UNIX の中でいち早く対応している。(データベースソフトの Oracle, ワードプロソフトの dp/NOTE など)

d. 最新ハードウェアに対するサポートが早い。

e. フリーソフトの導入も容易である。

また, Linux にはその配布形態から, 各種ディストリビューションが存在する。代表的なものを挙ると,

a. Slackware (古くからある Linux ディストリビューション, UNIX に慣れている人向け)

b. RedHat Linux (UNIX に詳しくない人でも扱えるように工夫されている)

c. Turbo Linux (b. と同様に, さらに, かな漢字変換システム ATOK も搭載されている)

d. LASER 5 Linux (b. と同様に, 日本語化されたソフトも多く, マニュアルも充実)

などが挙げられる。

参考 URL

<http://www.linux.or.jp/> (日本の Linux 情報)

・FreeBSD について

FreeBSD はその起源を 386BSD にまでたどることができる。386BSD は, BSD カーネルを PC で稼動させようとしたものであるが, そこで得られた経験を元に, 4.4BSD-Lite ベースの PC-UNIX が現在の FreeBSD となっている。その特徴は, Linux の項で述べたものもほとんど当てはまるが, さらに,

a. ワークステーションの管理を経験している人なら移行がたやすい。

b. 配布元が一本化されているので, ディストリビューションによる混乱がない。

などがあげられる。

参考 URL <http://www.jp.freebsd.org/>

*PC-UNIX, by Fumito OSAWA

**本学助手

Knowledge Worker の導入*

横山 敏秋**

附属図書館では、丸善が開発・販売を開始した学術情報ナビゲーションシステム Knowledge Worker (ナレッジワーカー) を平成11年10月に導入した。このシステムは単なるデータ検索にとどまらず電子図書館の一つの型を具現したものと言える。

主要な機能としては、

- ・和書、洋書、外国雑誌目次情報の横断検索
- ・本学図書館所蔵外国雑誌目次情報の閲覧

(British Library) 購読雑誌 6 万タイトルのうち主要 2 万タイトルの目次情報過去 3 年分である。特に外国雑誌目次情報に関しては、検索結果に本学図書館の所蔵雑誌が含まれている場合、その旨表示されるので、図書館で即座に該当論文を入手できる。またメニューの所蔵雑誌一覧から雑誌を選択すると各号毎に目次データが表示されこちらも図書館において入手可能であり、いわゆる電子的な

コンテンツシートサービスといえる。検索結果は、電子メールで送付することやダウンロードして文献リスト等を作成することも可能となっている (図 2 参照)。本学の場合、継続受入外国雑誌中約 80% が外国雑誌目次情報対象誌に含まれていた。

料金は定額であり接続時間やヒットレコード数を気にする必要はない。図書館ではこのシステムを教職員や大学院生等に無料で提供している。



図 1 キーワードサーチ画面

- ・電子ジャーナルへのゲートウェイ機能
 - ・図書が発注、状況照会
- があげられる (図 1 参照)。

また収録データは

- ・和書商品情報 160万の既刊, 新刊, 近刊図書
- ・洋書商品情報 200万の既刊, 新刊, 近刊図書
- ・外国雑誌商品情報 6万タイトルの商品情報
- ・外国雑誌コンテンツ 英国国立図書館



図 2 ピックアップ表示画面

* Introduction of Knowledge Worker system to Library, by Toshiaki YOKOYAMA

** 図書館情報課課長補佐

ローマでの研究生活*

藤井 敦**

1999年4月15日より半年間、共同研究のためローマの大学へ赴いた。先方から誘いがあり、私の専門が彼らのプロジェクトに役立つという。忙しい時期だったにも関わらず、周囲の理解や助けもあって無事成田を出発できた。

私が知る限りローマには3つの大学がある。最も歴史がある「La Sapienza」(学問の意)、次に古い「Tor Vergata」(地名に由来)、最新の「Terzo」(3番目の意)。

このうち私がいた Tor Vergata は、ローマ市街地よりはワインの産地として知られる Frascati にむしろ近く、郊外の広野に研究棟がポツポツと建ち並ぶ大学院大学的存在である。

アパートでは2人のルームメイトと台所、バスを共用した。どちらも La Sapienza の学生だが、英語は全くできなかった。EU加盟国ならどこでも英語が通じると考えてはいけない。以前3回旅行したものの、イタリア語の心得はなかった。しかし、教科書の例文を覚え、辞書を使ってとにかく彼らとイタリア語で“会話”した。

朝は近所のバールで軽い朝食をとってから路面電車と徒歩で40分ほどかけて大学へ行った。バール(bar)とは主にコーヒーを飲む所。日本の喫茶店のように座ってダラダラ過ごしたりしない。立ったままエスプレッソやカプチーノを引っかけて大抵の客は足早に去っていく。

イタリア一番の働き者はバールの店員だと思う。一杯100円ほどのコーヒーのために朝から晩まで動き回っている。観光客を当て込んだ高い店以外では、イタリア人よろしくチップを置くようにした。お釣が返されるタイミングを狙って「Va bene. (いや結構)」と言えればちょっとしたものだ。

大学では、持参したパソコンのおかげで日本語メールも使え、国情大の卒論生からは毎週研究の進捗状況を聞いていた。日本よりも7~8時間ほど遅れており、朝一番の作業は日本からのメールをさばくこと。その後で現地での研究と日本から持ち込んだ

研究を並行していた。

共同研究のスタッフは、教授・助手各1名と博士課程の学生数名。彼らとの会合は不定期。日本人とは異なる時空間で生活しているからだ。彼らが「5分後」と言えば明日。「来週」と言われたら、しつこく催促でもしない限り永久に来ない。

要は時間軸も自在に操る4次元人、いや逆戻りはできないから3.5次元人か。対してこちらは顔の凹凸がはっきりしない平面2次元人。この差引1.5次元の隔たりを克服するのが異文化コミュニケーションなるものか？

冗談はさておき、日本人から見れば数世代前のコンピュータで彼らは実によくやっていた。自然言語の計算機処理を中心に、ヨーロッパ言語を対象とした構文・意味解析の基礎研究から、新聞記事の内容抽出・理解の応用研究まで幅広く手掛けている。とりわけ「情報抽出」と呼ばれる自然言語理解の研究分野では有名なグループである。

国からの研究費はあまり当てにできず、予算を取るためにEUのプロジェクトに積極的に参加していた。私が関わったのもそのうちの一つで、ロイター(Reuters)の記事を内容に基づいて自動分類・配信するシステムの構築が目的。私は単語の多義性解消に関する研究で博士号を取得した経緯があるので、自動分類における意味情報の導入に関する研究を担当していた。

滞在期間も本稿の字数も残り少なくなったので、共同研究にひとまず区切りをつけ、成果発表も含めた今後の展開について話をまとめて、10月13日 Fiumicino 空港を発った。

今はもう2000年。一時のミレニアム熱も冷めたと思しき2月上旬、ローマから小包が届いた。私の論文が現地で刊行されたので冊子体をわざわざ送ってくれたのだ¹。

イタリア語でお礼のメールでも書いてみようかな。

¹Atsushi Fujii and Tetsuya Ishikawa. Japanese/English Cross-Language Information Retrieval. Technical Report RR-00.23, University of Roma, Tor Vergata, Jan. 2000.

* Academic Life in Rome, by Atsushi FUJII

**本学助手

卒業生・修了生のみなさんへ

一返し忘れた本はありませんか？

図書を返し忘れたままで卒業すると、他の利用者に迷惑をかけます。また、実家や就職先に文書や電話で督促しなければなりません。もう一度確かめてください。

卒業後も本は借りられます

本学を卒業・修了後、附属図書館資料の貸出を希望する方は、4月以降に附属図書館カウンターで登録手続をしてください(身分証明書が必要です)。翌年3月末まで有効の利用証を発行します。

貸出冊数は5冊まで、期間は3週間です。

購入雑誌の変更について

図書館に配架される購入雑誌について、平成12年度から変更となるものは以下のとおりです。

*新規購入誌

1. Information Retrieval

*購入中止誌

1. Quest / National Association for physical Education in Higher Education
2. Revue EP.S / Comité d'études et d'informations pédagogiques de l'éducation physique et du sport
3. sportwissenschaft
4. Idaho librarian : official publication of the Idaho library Association
5. Oklahoma librarian
6. Women in libraries : newsletter of the ALA/SRRT Feminist Task Force

- 1999.11.29 館報編集委員会(平成11年度第2回)
- 12.1 国立国会図書館専門資料部職員見学(1名)
名古屋大学附属図書館電子図書館推進委員会委員長他見学(5名)
 - 12.2 科学技術振興事業団研修生見学(14名)
 - 12.3 第32回関東地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議(於山梨医科大学, 図書館情報課長出席)
 - 12.7~9 平成11年度司書日本語研修実施
 - 12.8~9 国立大学図書館協議会シンポジウム(於横浜国立大学, 情報資料係長出席)
 - 12.15 釜山大学校図書館長他見学(6名)
- 2000.1.7 附属図書館委員会(平成11年度第7回)
- 1.12 釜山大学校図書館職員見学(7名)
 - 1.19 国際婦人教育振興会茨城支部見学(15名)
 - 1.28 アジア・太平洋地域ユネスコ国内委員会職員見学(5名)
 - 2.4 附属図書館委員会(平成11年度第8回)
 - 2.10 京都大学附属図書館職員見学(4名)
 - 2.18 タイ カセサート大学図書館アグリセンター長他見学(4名)
青森県立八戸高等学校図書館長他見学(2名)
 - 2.22 皇學館大学附属図書館職員見学(1名)

編集後記：時折冷たい風が戻ることはあっても、日ざしは前よりずっと明るく、暖くなりました。

草木や花の色が再び鮮明になるこの季節、新しく何かを始める全ての人達の上に、春の祝福がありますように… (寺本しほり)

最新情報は附属図書館ホームページをご覧ください。

(URL <http://www.ulis.ac.jp/library/>)

編集委員会：大庭治夫，長谷川秀彦，横山敏秋，菌部明子，佐藤まみ子，寺本しほり

図書館情報大学附属図書館報 Vol. 16 No. 1 2000年3月25日発行(季刊)

編集・発行 〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 図書館情報大学附属図書館 ☎0298-59-1210

Library, University of Library and Information Science/1-2 Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan